

二条天皇内裏歌壇と顕広

俊成研究ノート (2)

松野陽一

二条天皇は、即位して間もなくの頃から、歌会を頻繁に開いたらしい。後掲する資料から推察し得るところでは、近臣らの小規模な会が多く、経宗・惟方・師仲（この三人は、後白河院方と天皇方の対立で、永暦元年三月に院によって追放され、各地に配流されている）・重家・雅重・有房・長方・通能・範兼・讃岐・三河内侍といった人々が加わったようである。時折これに顕広・頼政・宗家といった人々を加わったようである。應保二年三月の貝合は例外だが、永暦元年七月の内裏百首、應保二年の艶書合等の注目すべき催も、規模はそれ程大きなものではない。記録は殆んど残されていないが、ほぼ詠作年時順の構成になっている。重家集によって輪郭は把握されるように思われるので、まず会とその歌題を年時順に摘出してみることにはしたい。なお、他資料によって同一歌会の作と推定されるものを注記した。

〔二条天皇内裏歌会〕——重家集に拠る——

保元四（平治元）

三月 (1) 内裏御会 花有喜色 経宗（月詣・千載）・範兼（新古今）

・顕広（長秋詠草・玉葉）

(2) 内裏御会 禁庭柳垂 顕広（長秋詠藻・玉葉）・頼政（頼政集）

政集）

(3) 内裏御会 近対藤花 争待時鳥 猥称会恋 惟方（粟田口別当入道集）

別当入道集）

(4) 方違行幸御会 旅宿郭公 夜深会恋（頼政。頼政集）

(5) 彼講以後当座御会片時 月前卯花 不慮絶恋（頼政。頼政集）

政集）

(6) 内裏当座御会卒爾 牡丹色々 隔二夜恋

(7) 方違行幸御会当座 時鳥 瞿麦 恋

(8) 内裏御会 躑中五月雨 逐夜増恋（頼政。頼政集）

(9) 内裏御会 江辺草深 夜々鶉河 契明夕恋（頼政。頼政集）

集）

(10) 彼講以後当座御会卒爾 如指燭哥 遠山昭射 伝人怨恋

(11) 内裏御会 竹風夜凉 謬尋他所恋（頼政。頼政集）

(12) 次如例卒爾歌会 潤五月雨

(13) 内裏御会 霸中見恋五首

永曆元年

(14) 彼講以後例の卒爾歌会 樹陰納涼 寄苔恋

(15) 内裏御会 草花猶稀 寄浦恋

(16) 次、例の卒爾歌会 契明月恋

(17) 萩戸御遊 卒爾歌会 禁中秋 虫声驚夢 始得返事恋

(次折句歌くつ) わむしを句のかみにおきて、こひのこころを

(18) 内裏御会 月 雁 恋

(19) 内裏御会 九月尽

(20) 次、例の卒爾歌会 菊留秋冬 念々不忘恋

(21) 内裏当座御会 水音似雨 憑明後日恋

(22) 又卒爾歌会 螢火知夜 媒心変恋

(23) 内裏御会^{当座} 泉辺待客 不寝恋

(24) 内裏当座御会 虫声先秋 被猷老恋

(25) 次、又例の卒爾歌会 池水似鏡 互怨恋

(26) 次、又卒爾歌会 兼思七夕 不通夜恋

(27) 内裏当座御会 樹陰如秋 曉推留恋 御製(今撰)

(28) 内裏当座御会 七夕後朝 寄織女恋

(29) 内裏百首 花 時鳥 月 雪 祝 初恋 忍恋 初逢恋

後朝恋 会不会恋(各十首) 御製(今撰・統詞花・千載・

統後拾遺・万代) 通能(今撰・統詞花・千載) 雅重(統詞花

・万代) 範兼(千載・万代・統後拾) 定隆(綱)?(万代)

応保二

葉出播 有房(有房集)・頭広(長秋詠草)

(31) 彼講以後例卒爾歌会 旅宿聞鹿 忍一会恋

(32) 内裏御会 梅花遠薰 人違会恋 長方(玉葉・按納言集)

(33) 同御会 関路霞 依和哥増恋 実国(実国集)

(34) 内裏御会^{当座} 行路款冬^(マ) 虚忘恋

(35) 講以後又御会 落花埋石 見朝帰恋

(36) 内裏御会 落花入簾

(37) 次、例の卒爾 藤花留客 馴不会恋

三月十四日

(38) 高倉内裏会(中宮貝合後宴歌合) 遙尋残花 思出旧女恋

実国(万代) 頭広(長秋詠藻・新千載)・有房(有房集)

・西行代作(山家集)

(39) 次例の当座 躑躅夾路 恥人目恋 有房(有房集)・讚岐

(二条院讚岐集)

(40) 内裏艶書合 範兼(新古)・御製・清輔・通能

(41) 内裏当座御会 旅宿春暮 不知在所恋

※(4)(5)(9)(11)の(頼政)は、頼政集に二条天皇内裏御会たる

ことを示さず、題だけが共通する歌である。平治元年に集中

していることでもあり、出詠(代作の可能性もある)と認め

て仮に付注した。

重家は、応保二年五月八日、造言によって解官された為、これ以降のことは不明であるが、平治元年（一一五九）から応保二年（一一六二）五月までの約三年強程の間に、四十一回を数える程多くの歌会が開かれている点は天皇の愛好の程がよく知られるように思われる。このほか、永暦元年（一一六〇）三月に追放された惟方の粟田口別当入道集には

夜思款冬 夏夜待月 夕聞蟬 行風夜涼 夕見草花

などの題がみられ、重家集にみられないものなので、この晩春と仲秋の歌は、重家の参加しなかった平治元年中の歌会の作ということになる。このほか、次にあげる資料は、右に見られぬものであり、規模は小さくても、活発な活動を見せた歌壇であったといえよう。それを整理をして示すと次の如くなる。

春―山花始開（御製・統詞花）、柳（師仲、玄玉）、春残二日（御製、月詣・千載）（頼政、頼政集）

夏―河辺草深（頼政代作歌、頼政集）、苜蓿有風（長方、按納言集）、月明似秋（実国、実国集）

秋―七夕（三河内侍、玄玉）、草花始開（長方、按納言集）

恋―恋（宗家、新勅）、恋（実国、実国集・万代集、問聞増恋（顕広、俊成家集・玉葉、頼政代作歌、頼政集）、山路見恋（長方、按納言集）、曉かへりなんとする恋（讚岐、新古今）、絶恋（範兼、万代）

雑―祝（頼政代作歌、頼政集） 禁中祝（頼政代作歌、頼政集）

こいたじぎ人折句歌V（雅重、千載。あるいは別の歌か）

※書陵部に『中御門大納言殿集』なる外題を記す本の孤本（四十一首収載）があり、詞書に「二条の院の十首 ほととぎす」「同御会月」「同祝」「同初恋」などとあって、十首ずつの被講をした内裏百首の作らしくもあり、とすると中御門内大臣宗能男の宗家の家集らしくもあるが、確証はないので、右には含めなかつた。井上宗雄氏・松野陽一「書陵部蔵『中御門大納言殿集』」へ解説と翻刻V（平安朝文学研究6。昭和36・1）参照。

これらの資料からうかがえるところでは、結題の傾向が崇徳院歌壇などより一層強まり、更に複雑化していることが知られるが、特に恋題には「猥称会恋」「隔二夜恋」「契明夕恋」「謬尋他所恋」「憑明後日恋」「媒心変恋」「被猷老恋」「依和哥増恋」「不知在所恋」といった、ひたすら難条件を設定してゆこうとする傾向のあることは否定できない。小人数で何度も繰り返されることが、この傾向に拍車をかけることになるわけであるが、これが歌そのものの質の高さにつながってゆかなかつたのは、凡庸な歌人ばかりであったことに最大の原因があるものの、彼等が歌を生活そのものの情趣化の手段と考えるという段階で留まっていたことに原因があらうかと思われる。例えば、千載集春下に載る次の歌

やよひのつこもりの頃、白河殿に御かたゝかへの行幸ありける
夜、「春残二日」といへる心をうへのをのこどもつかうまつりける
けるついでによませ給うける

二条院御製

われもまた春とともにや帰らましあすはかりをはこゝに暮して

などにみられる、時宜に適應した生活実感をなるべく情趣的に表現し享受してゆこうとする伝統的な貴族的美意識に拠ったもので、それがたまたま、結題流行の思潮に棹さして曲折微妙の風情を指向しようとする傾向になったものであろうかと思われる。従って、一見創作詩的傾向が濃厚であるように見えながら、本質的には、風情主義的生活実情歌に過ぎない場合が多いのである。本格的な歌題設定による歌会が少く、季節的なものを中心に中心がある例が多いことによっても、この歌壇の大凡の性格を知ることができよう。

さて、右の資料のうちから、顕広の出詠した歌会、及び注目すべき歌会をもう少し検討しておこう。

(1) 保元四年三月内裏歌会

題 花有喜色

作者 経宗・範兼・顕広・重家

本文

経宗

1 千代ふべきはしめの春と知りかほにけしきことなる初桜かな(千

載・月詠)

範兼

2 君が代にあへるは誰も嬉しきを花は色にも出てにける哉(新古今)

顕広

3 九重にほひをそふるさくら花いく千代春にあはむとすらん(長

秋詠藻、玉葉)

重家

4 はるかぜものどげきみよのうれしさははなのたもとせばくみえ

けり(重家集)

資料

〔千載集詞書〕 1

二条院の御時、大内におはしまして初めて花有喜色といへる心を

よませ給ひけるによみ侍ける

〔重家集詞書〕 4

内裏にてはじめて御会ありしに、花有喜色といふ題を

〔月詠集詞書〕 1

保元四年二月内裏の御会に花によるこびの色ありといふことを

〔私注〕千載・重家集詞書に「初めて」とあるように、二条天皇内裏初度御会であった。それ故に賀題であり、作者も経宗・重家らの天皇親近者ばかりでなく、顕広・範兼ら歌歴のある歌人が選ばれているであろう。この他にも出詠者は多かつたものと推測される。

(2) 同年春内裏歌会

題 禁庭柳垂

作者 顕広・重家・頼政

顕広

1 春くれば玉のみぎりをはらひけり柳のいとやとものみやつこ

重家

2 にはのおもはひまなくはらふあをやぎにまかせてをみよとものみ

やつこ(重家集)

頼政

3 紫もあけもつらなる庭の面に又みどりなる玉柳かな(頼政集)

資料

〔長秋詠藻詞書〕1

おなじ春、内裏御会、禁庭柳垂といふころを

〔重家集詞書〕2

又、内にて、禁庭柳垂といふ題を

〔私注〕(1)の初度御会に続いて、同じ三月に催された御会である(『和歌文学大辞典』年表に、(2)を同時の会の如く記しているのは訂すべきであろう)。頼政と重家の歌は類似した趣向であるが、重家の方が「ひまなくはらふ」によって、「とものみやつこ」を柳に結びつけた着想に徹してゆこうとする知巧的な作意をもっているのに対し、頼政の方は、上句に賀意をこめ、「禁庭」をゆったりと大きく優雅な姿にとらえて、質はかなり異っている。頼政の歌は、長秋詠藻では、桜の歌群中に配されているので、歌群として鑑賞する場合には垂柳が払っている「玉のみぎり」の上には落花の散り敷いているイメージが浮び上ってくるが、一首としての作意としてもその艶なる効果は計算に入っていたかもしれない。頼政のはとりどりの着衣と柳の色彩の取り合せに趣向の中心を置いた知巧的な歌であり、やや地下官人的な感覚の

作品といつてよいだろう。かような賀会の作にも個性の差が多少は見られる点に関心が寄せられる。

なお、(4)(7)にこの年の夏と考えられる方違行幸歌会が上げられているが、前に引いた白河殿への三月末の例も同様、しばしば方違行幸の際に歌会が開かれたようだ。しかし、『和歌文学大辞典』年表の平治元年の条に、二月十九日の方違行幸歌会をあげ、山槐記、古今著聞集、重家集を典拠にあげているのは、いささか記述の仕方に問題があるように思われる。山槐記は二月十九日の押小路殿への方違行幸を記すが歌会の記載はなく、著聞集は二月二十五日と記し、重家集は前記の如く夏の二度の際のものである。この種の会が何度かあり、その一つが伝承されて著聞集に入ったという認識に立つことが肝要であろう。

(29) 内裏百首

重家集詞書に「永曆二年七月二日賜題、四日被始講、隔日十首被講之。十九ヶ日終篇。此百首皆以別様、然而事為嚴重、併可入何敷、仍別不合点、又為下品者全分可被除敷」という注記がある。これによって、花・時鳥・月・雪・祝・初恋・忍恋・初逢恋・後朝恋・会不恋の十題が、同年七月二日に出され、二日後の四日から一日置きに十首(一題ずつであろう)ずつ披露され、十九ヶ日というから、七月二十二日に講了したのであろう。歌題は単純ながら、恋題が半数を占め、重視されているのが注目される。十首が単位になった百首という点は崇徳院の句題百首や小野宮侍従(師光)百首(風情集・林葉集・清輔集・師光集)によって知られる。この百首からの撰歌合が永曆元年七月

の清輔家歌合であるから、二条天皇百首はこの影響を受けた企画のよ
うに思われる)、後年の治承二年兼実家百首に共通している。披講の
条件を考慮した企画であろう。「此百首皆以別様」以下の文意は難解
であるが「別様」は歌人毎もしくは歌題毎に別様に記すの意なのであ
ろうか。「然而」以下は、作品の完成度と質の高さ、並びに形式を嚴
重に整える為に、歌稿の形などで各題毎に何首か余計に書いておき、
それに合点を付したりするようなことはせず、「下品」の歌は全部除
去し、自ら秀作と認めるもののみを記さねばならぬという内容である
う。とすると、「別様」は全体として統一した書様は無く、各人毎に
自由に別様に記すということをしていると解せそうに思われる。

出詠者は、前掲諸種資料によると、二条天皇・重家・通能・雅重・
範兼・定隆らが知られる。いずれも天皇とその親近者であり、有力歌
人は招かれていない。久安百首の如き周到な準備を整えた、晴儀性の
強い百首ではなく、あくまで平常の御会の調子に近いペースを保
ち、前記詞書注記の如き、心持ちあらたまつた形に整えた百首であつ
た。他にも出詠者のあつた可能性はあろうが、顕広は含まれていなか
つたものと考えてよいであろう。

(90) 永曆二年秋東三条内裏五首歌合

本文拾遺

風動野花 重家

1 かねてよりわがしめしのゝおみなへしねたくも風にうちなびきぬ
る(重家集)

顕広

2 きみかよは遠里小野の秋はきも散らさぬほどの風ぞ吹きける(長
秋詠藻)

夜雨聞虫 重家

3 たのめけむ人はあめにもさはらしをなとまつむしのこゝらなくら
ん(重家集)

有房

4 つゆけしとおもひかほなりむしのねもこよひは身にあまそゝきし
て(有房集)

湖上曉月 重家

5 まのゝうらをこぎいでゝみればさゝなみやひらのたかねに月かた
ふきぬ(重家集・今撰集・治承三十六人歌合)

有房

6 ありあけの月のひかりにふなてせんしもふきはらへまのゝはまか
せ(有房集)

鹿声何方 重家

7 さをしかのあらしにたぐふこゑすなりいづれの山のかかねなるら
ん(重家集)

顕広

8 吹き迷ふ風にたぐふ鹿の音はひとかたならず袖ぬらしけり(長秋
詠藻)

有房

9 おぼつかなたつきもしらぬゆふきりにいつれのみねそをしかなくなり (有房集)

10 しかのねはまたもきこえてやみぬめりのはらしのはらいつくなるらん (有房集)

紅葉出づ 重家

11 わが物といはぬばかりぞあしがきのまちかきやどのはじのたちえは (重家集)

顕広

12 やまひめや岩垣隠れたはらんもみちがさねの袖のみえつる (長秋詠藻)

資料

〔長秋詠藻詞書〕 2

二条院の御時、東三条におはしますころ應製五首のうち

〔私注〕重家集では、(内裏百首 (七月二十二日最終披講) に次いで配されており、この会の披講後の卒爾の歌会の題に「旅宿聞鹿」があるから、恐らく、永暦二年七月下旬から八月初旬にかけての張行である。この内裏歌壇の歌会は、前記の如く、通常は三題以下であってこの歌会は唯一の例外の五題、しかも恋題も含まれていない。百首会を終えてやや格の高さを求める心が働いた企画の故でか、顕広が招かれている。顕広の「風動野花」には治世讚美の賀意がこめられており重家、有房らの他の作と異った性質の歌になっている。常連ではなくたまさかの出詠の故に現われた現象ではないかと思われる。

〔8〕 応保二年三月十三日中宮育子貝合

資料的には、『平安朝歌合大成』巻七に整理されている(長秋詠藻・万代集・有房集所収歌は佚しているようである)ので、略記するにとどめるが、会の大要は、山槐記と袋草紙所収の記事によって知られるようである。就中、顕広に関することは、袋草紙によって知ることができる。この催は、十一世紀以来の久々の晴儀歌合としての行事様式を具備して、応保二年三月十三日、高倉殿御所において行なわれた。萩谷氏は、右大臣藤原実能女で関白忠通の養女の育子の、中宮立后(同年二月十六日)の慶びによって企画されたものかと推測されている。二条天皇以下、卿相侍臣挙って経営にあたり、会に先んじての神社奉幣、報賽の儀、当日の誦経、風流洲浜の仕立て、方人装束の取り決めにいたるまで、当歌壇としては全く例外的な、大がかりな企画であった。従って、実質的な主催者は、二条天皇自身であったといえるのである。後宴としての歌合は、翌十四日に行なわれたが、題は、先んじて七日に出されていた。貝合の方人としては、左方が実長・親隆・重家・通能・為親・忠親、右方が右大将兼実以下、歌合の出詠者は重家・実国・顕広・有房が、また、袋草紙によって範兼・雅重・清輔が、そして続いて行なわれた当座歌合では、有房と讚岐が確認されている。なお、貝合の洲浜の貝にそえられた歌の代作に西行が出詠しているが、これは、育子が実能女であり、徳大寺家出身の中宮である縁によるものであろう(窪田章一郎博士『西行の研究』参照)。

萩谷氏は、出観集の

同じ御時（二条）内裏にて貝合あるべしと聞えけるに、ある人の歌を申しければ

百歌の玉のうてなの簾貝芦屋が浦に波やかかけむ

雲の上に散りぞまがへる春風の吹上の浜の梅の花貝

また、林葉集の

後の宮の御方に歌合あらむとて、九条太政大臣よませ侍りし

ば、立春の心を

いつしかと朝日の影のしるきかなのどけかるべき千代の初春

の二資料についても、前者は西行歌と同様な洲浜にそえられた歌、後者は『立春の心』というのは、俊恵の詠作に際しての歌意をのべたにすぎず、やはり本貝合の中の祝賀の歌と仮定されているが、前者は「百歌の玉のうてな」「雲の上に」の表現があることから、覚性法親王が「ある人」の歌を讃めた歌、後者も、恐らく同年中の別の機会に后宮の御方で催された歌会と考えておきたい。

袋草紙によると、十四日の歌合は「月卿両三雲客数十」という出席者で、衆議判であつたらしく、範兼・顕広・清輔ら専門歌人の発言によって大勢が決つていったらしい。後掲の有房の歌の「このもかのもの表現をめぐって、範兼・顕広の説を清輔が論破したのは著名な事実である。袋草紙にはいささか手前ぼめがあるとしても、この歌合に際して清輔が殿上を許されたことは事実であり（清輔集・重家集・袋草紙）、既に平治元年に古今集や袋草紙初稿本を天皇に進献した（顕昭古今集注奥書、袋草紙奥書）わけであるが、一層天皇の親任を得て、

第七代勅撰集を目指しての『統詞花集』の編纂（崩御後に完成。私撰集にとどまる。谷山博士『千載集と諸私撰集』人文研究2・12。昭和26・12、拙稿「統詞花集雑考」平安文学研究36。昭和41・6参照）にこの後進むことになつたのであろう。

十四日の歌合及び当座歌合の本文を集成すると次の如くなる。

○後宴歌合

遙尋残花 有房

1 ちりぬらんとおもふくそたつねこしうれしかりけるをそさくらかな（有房集） 実国

2 山ふかみ猶たつねゆけおのつから青葉ましりに花やのころと（万代）

思出旧女恋 顕広

3 むかし見し野中の水にたづねきて更に袖をもぬらしつる哉（長秋詠藻、俊成家集、新千載）

資料

〔長秋詠藻354詞書〕3

二条院御時、思出旧女恋という事を、たかくらの内裏の御会

(39) 応保二年三月十四日当座歌合

題 躑躅夾路 恥人目恋（出題範兼）

作者 有房 二条院讃岐

躑躅夾路 有房

1 いはつゝじこのもかものにもさくころはすきそやられぬみねのほそ
みち(有房集)

讃岐

2 いつ方も散らさでゆかむ岩つつじ左も右もまくり手にして(二条
院讃岐集)

資料

〔袋草紙〕

(前略) 躑躅歌、此のも彼のもと詠歌出来。範兼難云、此のも彼
のもは筑波山之外不可詠。彼山八方有三面、方方有景之故也。

何平地之路可然哉。顕広云、然也。近歌合にも如此難敷。予云、

基俊判敷。顕広此時承伏て然也と云。範兼傍若無人成て、然ば為

負之由称。于レ時予云、雖レ然事之外僻事也。于レ茲重家云、基俊

が書置事、末生難レ称レ僻事敷。予云、基俊説を末生以今案難、

尤可レ然、基俊より先達若有申事、如何。人人、尤有レ興。有証歌

者可レ出、被責。暫停滞、頻有レ其責。予申云、躬恒が仮名序には

「漢河鳥鵲のより羽の橋を港して此のも彼のものに行きかふ」と書

きたる様に覚悟す。如何。于レ時、主上より奉レ始満座鼓動及三簾

中。範兼少有興違之氣、仍定レ勝。範兼・顕広同心之時、如レ虎

聞三証文復如レ鼠也。後日世間に鼓動して感嘆無極云々。但、

万葉には此面彼面と書顯。然者普通之事也。知りたる不三高名、

不レ知が不覚也(後略)。

なお、「このもかもの」についてであるが、顕広はこれに先んじて

康治年間の待賢門院結縁の法華經二十八品歌中に、

菓草喻品 無有彼此 愛憎之心

春雨は此面彼面の草も木もわかずみどりに染むるなりけり

と詠んでいる。筑波山に必ずしもこだわっていないのである(谷山博

士「藤原俊成年譜」参照)。

(40) 応保二年春 内裏艶書合

恐らく、堀河院艶書合に倣った企画であろうが、堀河内裏のものが

日数をかけ、行事様式も整え、実際に殿上人と女房のやりとりの形を

とったのに対し、こちらは天皇近臣の男性のみの当座の催であった。

重家集には、

内艶書御会事之為躰、一人進本歌夫艶女由歌也各代女返歌、一巡まいらせお

はる。次進恨歌女恨夫由歌也又各代夫進返歌。当座卒爾也。於人々返歌等者

忘却了。各本歌并自歌許書之。

とあり、大要の内容は知ることができる。つまり、出席者の一人がま

ず、男が女に懸想する歌を詠み、他の歌人が女になってそれへの返歌

を詠むという形で、出詠者全員が同様に詠み合って一巡し、次いで、

女が男を恨む歌とそれへの男の返歌を、前と同じ要領で詠むというわ

けである。重家集によると、出詠者は、重家自身、大学頭(範兼)、

三位大進(清輔)、二条天皇、源少将(通能)の五人だったようであ

る。前の貝合後宴歌合が三月十四日だったわけであり、次の(41)当座歌

合が暮題の歌題を持っているから、三月後半の張行だったのである

う。この僅かな人数の親密な風流の会に早速清輔が登用されているの

に、顕広が出ていない点に注目したい。彼には天皇の愛顧は、崇徳院の場合のように及ばなかったようである。

○年代不詳内裏歌合

題 問聞増恋

作者 顕広 頼政代作

本文拾遺

二条院の御時内裏の歌会にとひきよてまさるこひといふころをよませたまうとき (顕広)

1 いもがうへはしばのいほりの雨なれやこまかにきくにそこのぬる

らむ (俊成家集・王葉)

二条院のくらゐの御時、問聞増恋といふころを人にかはりてうき人の上をはえこそ問果ね又問たびにねのみなかれて(頼政集)「私注」例によって、本来は季題と合せた恋題だったものと思われるが、詳細は不明である。頼政は、二条天皇内裏歌壇の歌会に、四首代作を残しているが、一族の讃岐や三河内侍は名手なので、この場合は他の女房などでもあろうか。代作を必要とするような場合なので、この御会は、ややあらたまつた会であつたように推察される。顕広の歌は、長秋詠藻の方には入らず、俊成家集編纂に際して追加された歌であることが注目される。

○永暦二年四月二十八日御書所作文会

山槐記当日の条に次の如くある。

今夜御書所作文云々、仮以殿上北庇

大炊御内殿儀、主殿司宿弁侍臣宿所 為三

其所一、懸御簾、主上密々御覽云々、題広、鶴作勝遊友^字、有連句云々、参仕雲客左京権大夫顕広朝臣、若狭守重家朝臣、大藏卿長成朝臣、権中弁成頼朝臣、左少弁俊経、藏人皇后宮権大進長方、儒者式部大輔永範朝臣、大学頭範兼^{己上御}、美濃守有光朝臣、前大内記範明朝臣、大内記信重^辨、式部権少輔成光、式部大夫敦周云々。「私注」歌会ではないが参考までに掲げておく。作文会なので、若干異つた顔振れもみられるが、ほぼ、歌会の常連がここにも出席している。天皇の臨席といい、連句を行なっている点といい、ほぼ同趣の会であつたといえよう。顕広の出席も注目してよい。

以上、顕広の出詠した歌会を中心とし主な歌会にも若干触れたわけであるが、二条天皇内裏歌壇は、概括すると、天皇を中心として近臣の少数の常連によって、かなり趣味的な傾向を持った形で活動をもつていた歌壇であるといふことがいへよう。そうした中であつて、顕広は、中宮貝合や初度御会など、どちらかといえば晴儀性の強い会にのみ出詠しているのであつて、常連というより、歌暦の古い歌人として、歌会の格式を整える時に招かれるという遇され方をしていたのではないかと思われる。崇徳院歌壇における顕広の位置は、この歌壇では(応保二年春以後であるが)清輔によって占められていたといつてよいだろう。中宮貝合後宴歌合についての袋草紙の記事から推察するところ、天皇から、一応の敬意をもつた遇され方はしていたが、親近感をもたれていなかったように思われる。しかしながら、当歌壇歌会

への顕広の出詠歌は残されている限りでは、質の高い歌が揃っており、長秋詠藻でも、五首（俊成家集を含めれば六首）を入れており、鳥羽院歌壇二首、崇徳院歌壇十一首（天皇后三首、上皇后八首）、後白河院供花会六首と比して、決して遜色ないだけの作を採っているの
である。当代の公的な場での活動が、他の時代にさほど劣っていない
ことを示しているといえよう。

（文芸科教授）